

The Progress of the Soul における John Donne の表現法について

柴 鉄 也

1

1601年8月16日という日付で John Donne はひとつの風刺詩を書いている。

INFINITATI SACRUM,

16 AUGUSTI 1601.

Metempsychosis

Poema Satyricon

という総題のあとに400語を越す荘重体の Epistle (書簡) が付けられ、その後、詩が始まる。

The Progresse of the Soule

First Song

I

I sing the progresse of a deathlesse Soule,
Whom Fate, which God made, but doth not controule,
Plac'd in most shapes; all times before the law
Yoak'd us, and when, and since, in this I sing.
And the great world to his aged evening;
From infant morne, through manly noone I draw.
What the gold Chaldee or silver Persian saw,
Greeke brasse, or Roman iron, is in this one;

A worke t'outweare Seths pillars, bricke and stone,
And (holy writt excepted) made to yeeld to none.

叙事詩の決まりに従って“I sing…”と麗々しく始まった詩は、しかし、52連520行に渡って続いた後、唐突に終わる。私たちは Second Song を読むことはないし、First Song も未完のままである。

Donne の風刺詩、警句、書簡詩を編纂した W. Milgate はこの詩を次のように概説している。

In August 1601 Donne hit upon what seems to have been an exciting idea for a satiric poem of quite a new type... In it he proposed to trace the history of the soul of the apple from the Tree of Knowledge which Adam and Eve ate. He adopted for the purpose of the poem a form of the theory of metempsychosis: that a soul is able to move indifferently into the bodies of plants, birds, fish, animals, women and men, as each of its previous bodies die⁽¹⁾.

Milgate の言う「風刺をめぐる新しいアイデア」とは、風刺詩を叙事詩の形を借りて書くことであるが、叙事詩とは人間の偉業を高らかに歌い上げるものであって、人間の愚行や悪徳をさらけ出す風刺とは相容れない⁽²⁾。Frank J. Warnke によれば、こうした詩形の風刺詩は1590年代には見られなかったものであり、風刺という目的とその語りのトーン、そこで用いられる技法と詩形との乖離が詩に奇妙な印象を与え、詩人の意図に疑問を引き起こす⁽³⁾。表現の試みとして当時、新しいものであったが⁽⁴⁾、風刺の持つある種の小気味よさ、対象に対する批判、揶揄が叙事詩という大きな入れ物としっくりこないのだ。

読者に違和感を与える叙事詩という形式と風刺という内容のギャップとは別に、この詩はもうひとつ、読者に違和感、抵抗感を与える要素を持っている。それは Milgate の概説にもあるように、詩の構成が「魂の遍歴」をめぐる物語である点だ。

総題にある Metempsychosis とは「輪廻転生」のことであり、ペンギン版のダン全詩集を編纂した A. J. Smith の注釈によれば、これは「死に際して、または死後に人や動物の魂が、同じ種や、別の種の新しい身体に移行することであり、ピタゴラス派の教義と考えられていた」という⁽⁵⁾。「輪廻転生」そのものは、当時、さほど珍しい考えではなく、ネオプラ

トニズムの解釈も加わって、教会の説教にも使われ、Donne 自身、*Pseudo-martyr* のなかでも言及している⁽⁶⁾。

アダムとイブが食べた林檎の実に宿っていた魂が様々な植物、動物へと宿主を替え、その都度、それぞれの宿主が持っていた悪徳を身につけ、その悪徳を積み増して、ついには多くの悪徳を持って人間の中に入っていく⁽⁷⁾。

The Progress of the Soul では、この「輪廻転生」を軸に聖書、プリニウスの博物学、スコラ哲学、カバラやグノーシス派の知識、ユダヤ教の寓意さらにはエリザベス朝の海外奇譚に至るまで、Donne の「博識」が詩の中に持ち込まれ、時として風刺という目的から逸脱し、知識の羅列そのものに詩人は熱中しているようにさえ見える。聖書のエピソードや様々な伝説、伝承と並んで光の屈折率、解剖学的描写、動物に擬した性的言及、それらを踏まえた風刺的言説が雑然と並ぶ。様々な話題、説教、因果応報が、ただひとつの変身の原理、「魂の遍歴」に従って展開される。その結果、詩は統一感、立体感を喪失し、自らの重みを支えかねて迷走していく。

この詩の歪さ、グロテスクさを批判する意見は枚挙にいとまがない。“failure”, “sheer ugliness”, “wantonly repulsive”, “most disappointing” などの言葉がこの詩の批評に並ぶ⁽⁸⁾。それも Donne の詩の再評価に大きく関わった H. J. C. Grierson, R. C. Bald, E. Hardy らから投げられたものである。一部の例外的読者を除いて⁽⁹⁾、ビクトリア朝、エドワード朝、20世紀前半までの文学規範、道徳基準からすればこの詩は容認し難いだろう。しかし、*The Progress of the Soul* はそれほど「無様で放恣で無秩序で反感をかき立てる詩」なのであろうか。

この詩のなかに、詩としての価値、新しさ、他にはない独創性を発見しようとする試みが始まるのは形而上詩ブームがピークを過ぎた20世紀もかなり後半になってからである。以下、表現の問題を中心にして *The Progress of the Soul* を検討していくこととする。

2

エリザベス朝の重要な長編詩5編の中にこの詩を選択した Seymour-Smith は、「謎めいた、断片的な詩」とこの詩の欠点を認めながらも、*The Progress of the Soul* の再検討を促しているが⁽¹⁰⁾、その主張は部分的肯定論といった趣であり面白みはない。例えば、詩人がこの叙事詩の目的を宣言する部分（すでに注で引用）を Donne の最上の詩行であるとする⁽¹¹⁾。

For though through many streights, and lands I roame,
I launch at paradise, and I saile towards home; (ll.56-7)

そして、こうした詩行が *The Progress of the Soul* には多く含まれているという。“wantonly repulsive” に比べれば、はるかに詩人に同情的ではあるが、これは特に新しい主張とは言えない。John Carey もまた Donne の描写を賞賛する。

Into a small blew shell, the which a poore
 Warne bird orespread, and sat still evermore,
 Till her inclos'd child kickt, and pick'd it selfe a dore.

Outcrept a sparrow, this soules moving Inne,
 On whose raw armes stiffe feathers now begin,
 As childrens teeth through gummes, to breake with paine,
 His flesh is jelly yet, and his bones threds,
 All a new downy mantle overspreads,
 A mouth he opes, which would as much containe
 As his late house, and the first hour speaks plaine,
 And chirps alowd for meat. Meat fit for men
 His father steales for him, and so feeds then
 One, that within a moneth, will beate him from his hen. (ll.178-190)

「卵の殻の色合い」「母鳥の体温」「濡れてゼリー状の雛」「産毛」など、華奢でありながら、なおかつ生きようとする生まれたばかりの雛鳥を、これほど暖かい目で描写した詩行には詩人の同時代人も目を見張ったであろうというのがその理由である⁽¹²⁾。

Milgate もまた次のような行を引用して “the deligtful movement of lines” と Donne の「朗々とした、音楽的詩句」を褒める⁽¹³⁾。

The free inhabitants of the Plyant aire. (l.215)
 I launch at paradise, and I saile towards home; (l.57)

Donne は揺るぐことなく細部を描き、その全作品のなかでもこれほど自然描写に優れたものはないとする。「自然描写」は元来、Donne には欠けているものとされているのだが、“a conspicuous example is his account of the hatching of the sparrow, which is at once accurate, closely observed, and tender” はかなりの賞賛である。人間の胎児に関しては “he can de-

scribe with the utmost lucidity and with imaginative vividness the formation of the human embryo” とこれもまた極上の賞賛である。

しかし、これらの「最上の詩行」「細密な自然描写」「朗々とした、音楽的詩句」の前後には、「最上の詩行」「細密な自然描写」「朗々とした、音楽的詩句」とはいえそうもない詩句が混在する。

例えば鯨について語る時である。この詩の主人公である魂が、林檎、マンドレイク、雀、小魚（白鳥の腹の中）、カマスを経てたどり着いた宿主である鯨を詩人は次のように表現する。

Into an embrion fish, our Soule is throwne,
 And in due time throwne out againe, and growne
 To such vastnesse as, if unmanacled
 From Greece, Morea were, and that by some
 Earthquake unrooted, loose Morea swome,
 Or seas from Africks body had severed
 And torne the hopefull Promontories head,
 This fish would seeme these, and, when all hopes faile,
 A great ship overset, or without saile
 Hulling, might (when this was a whelp) be like this whale.

At every stroake his brazen finnes do take,
 More circles in the broken sea they make
 Than cannons voices, when the aire they teare:
 His ribs are pillars, and his high arch'd roofe
 Of barke that blunts best steele, is thunder-proofe:
 Swimme in him swallow'd Dolphins, without feare,
 And feele no sides, as if his vast wombe were
 Some inland sea, and ever as hee went
 Hee spouted rivers up, as if he ment
 To joyne our seas, with seas above the firmament. (ll.301-320)

ここに雀の雛の孵化のような、自らの目で対象を細かに眺め、共感を寄せるような描写はない。そうではなくて、中世からの博物誌に描かれた生物のように、誇張され、図形化された鯨である。そして、この浮かぶ島のような大魚は様々な知識の援用を受けて、視覚的にも、概念的にも巨大化する¹⁴。巨船を沈め、大海を暴れ回り、恐怖を掻き立て、イギリスへと向かってくる。

He hunts not fish, but as an officer,
 Stays in his court, at his owne net, and there
 All suitors of all sorts themselves enthrall;
 So on his backe lyes this whale wantoning,
 And in his gulfe-like throat, sucks every thing
 That passeth neare. Fish chaseth fish, and all,
 Flyer and follower, in this whirlepoole fall;
 O might not states of more equality
 Consist? and is it of necessity
 That thousand guiltlesse smals, to make one great, must die? (ll.321-330)

ここで寓意が大きく前面に出てくる。大魚を国家に擬した風刺であり、「国家というものは、この大魚のようなものであって、ひとつのものを強大にするには、小さな無辜のものが数多く死ななくてはならないのだ」という *The Progress of the Soul* の本来の姿、時々見られる「最上の詩行」や「細密な自然描写」を例外とする Donne の厳しい世俗批判がある¹⁵。この擬人化された鯨は世俗の悪の化身である。

象について語る時も同様である。“The flaile-finn'd Thresher, and steel-beak'd Sword-fish” (尾長鯨とカジキマグロ) の反逆によって倒された鯨から、主人公である魂は次の宿主として鼠に入り込むこととなる。

Natures great master-peece, an Elephant,
 The onely harmlesse great thing; the giant
 Of beasts; who thought, no more had gone, to make one wise
 But to be just, and thankfull, loth to offend,
 (Yet nature hath given him no knees to bend)

Himselfe he up-props, on himselfe relies,
 And foe to none, suspects no enemies,
 Still sleeping stood; vex'd not his fantasie
 Blacke dreames; like an unbent bow, carelessly
 His sinewy Proboscis did remisly lie. (ll.381-390)

アイデアとしてはプリニウスの博物誌にある象と鼠の話であり、当時の民間伝承によれば象は忠節心を持つ生き物で、花や美しい女を大切にし、節度、貞節、従順といった美德を具える⁶⁹。つまり人間の悪徳の対極に位置する。この象は、全く現実的ではない。鯨同様、伝説的に図式化される。「自然の作り出した傑作であり、大きな生き物のなかでただひとつ、無害な生き物である象」は恭しく跪く。Donneは崇高なものを狡猾なものが打ち倒すという現実を描くために、寓話の世界から非現実的な一枚の象の絵を切り取り、読者に提示するのである。象の鼻の穴を伝って体内に入り込み、象の脳を食い破る狡猾な鼠というグロテスクな絵である。この絵も絵画的ではなく、説明図のように図式的である。

3

The Progress of the Soul のなかには Seymour-Smith, John Carey, W. Milgate らが指摘する「最上の詩行」「細密な自然描写」「朗々とした、音楽的詩句」があるのは確かだが、詩行の多くは既に触れたように、聖書、プリニウスの博物学、スコラ哲学、カバラやグノーシス派の知識、エリザベス朝の海外奇譚に至るまでの Donne の「博識」が盛り込まれ、それぞれのエピソードに皮肉、韜晦、風刺が付け加わる。この「博識」は風刺のための道具なのだろうか？ 風刺のために、これほどの「雑学」が必要なのだろうか？

Seymour-Smith も、「いい詩行がある」という程度で、この詩を再評価すべきだと言っているのではない。部分的肯定論から抜け出すように、とはいえ遠慮がちに、以下のように述べる。

The Progresse of the Soule is best read, I believe, as an ambivalent comic poem, by an undecided man. It was a largely unsuccessful (because ultimately so unwieldy) effort to resolve tension between intellectual curiosity and temperamental conservatism. The prevailing tone — but it is not wholly convincing, and was not in fact sustained — is one of cynical, baroque scepticism⁶⁷.

Donne の不満は、既存のもっともらしい神学的世界観や心理的な現実感に乏しい世界理解に対して向けられる。深刻な問題を皮肉り、揶揄しつつ、博識は戦いの道具であり、知にはより多くの知で対抗する。それは Donne 個人の探求好きといった性癖もあるが、それと並んで、詩人としての独創性の探求、不寛容に対する反感、魂の遍歴という主題に対する可能性の探求でもあった。*The Progress of the Soul* は詩として失敗に終わったかもしれないが、この思考法は以後も保持される。これが、Seymour-Smith の言う “one of cynical, baroque scepticism” である。

Donne はルネッサンスと新古典主義時代の狭間にあって、様々な模索をする。しばしば Spencer や Milton, Dryden や Pope と比べられ、その言葉数の多さ、描写の長さを指摘される。「同じ事を、Dryden なら半分の行数で、Pope なら四分の一の行で書いたことだろう」と言われたりする⁰⁸。Donne は浪費家のように言葉を使い、イメージを使い、知識を使う。“spare, witty, intellectual, paradoxical trend” は Baroque 詩の特徴であり Donne に代表されると Frank J. Warnke は言うが⁰⁹、それは代表作とされる *Songs and Sonnets* の叙情詩には当てはまる。しかし *The Progress of the Soul* のように “extravagant” で “oblique” な詩もあるのだ。

「輪廻転生」という一本の糸をたよりに変身が進行し、言葉、イメージ、知識が過剰なほどに詰め込まれ、それぞれが増殖を繰り返す詩は、整然さや理性によるコントロールを失い、歪み、偏芯していく。それが批判を招くのであるが、詩は迷走しながらも目的地に向い、次から次とめまぐるしく景色を変えるなか、乱雑で、それでいて次に何が来るか分からない期待さえ持たせる。

「言葉の力」「ビジョンの力」「知識の力」と総力を挙げて世界把握に向かう Donne の姿には同時代的共感を持たざるをえない。

4

SINCE Christ embraced the cross itself, dare I

His image, th' image of His cross, deny ? (II.1-2)

と始まる Donne の宗教詩 “*The Cross*” は、一つの言葉を糸として構成される。64行に渡る詩が “cross” という語の多義性によって支えられている。詩作法としては *The Progress of the Soul* と同じである。

1612年、パトロンに注文されて、Donne は見ず知らずの少女の死を悼んで500行を越す長編詩を書いたが、ここでは少女の死後の魂の遍歴を一本の糸として、概念のレベルでの遍歴

が語られる。この *The Second Anniversary* は正式には *Of The Progress of the Soul: The Second Anniversary* という。Donne は *The Progress of the Soul* を書いた10年前と変わっていない。

注

- (1) W. Milgate (ed.), *John Donne: The Satires, Epigrams and Verse Letters*, (Oxford Clarendon Press, 1967) p.xxv.
- (2) Milgate, p.xxvii
- (3) Frank J. Warnke, *John Donne*, (Boston 1987) p.23
- (4) Martin Seymour-Smith, *Longer Elizabethan Poems*, (London 1972) pp. 30-31

We know from the poem itself that the theme is the progressive corruption of a soul by the various bodies it inhabit; but each episode is satirically treated. Donne was combining a (largely) mock 'high' (epic) style with a markedly 'low' (satirical) style. Thus this poem, which first appeared in the posthumous 1633 volume of Donne's poems, was of considerable originality.

- (5) A. J. Smit, *John Donne: The Complete English Poems* (London 1971) p.504
- (6) Milgate, p.171
- (7) *The Progress of the Soul* 研究のひとつのテーマが、ここから生じる。未完に終わったこの詩の主人公である魂が最後に行き着くのは誰なのかという問題である。詩では最初の部分に次のように予告されている。

For though through many streights, and lands I roame,
I launch at paradise, and I saile towards home;
The course I there began, shall here be staid,
Sailes hoised there, stroke here, and anchors laid
In Thames, which were at Tigrys, and Euphrates waide. (ll.56-60)

この魂の遍歴は楽園 (paradise) から始まり、本国のイギリス (home) で終わるわけだが、では、誰に宿るのか。この犯人探しは、読者の興味をそそり、様々な推測が行われている。Donne の同時代人、Ben Jonson は Calvin ではないかと言い、また、Luther であるとか、Queen Elizabeth 説も多く語られる。最近では、伝記的研究から、当時の有力な政治家 Robert Cecil 説、いや Donne 自身ではないかという穿った説さえある。いずれにせよ詩は未完であり、犯人探しは迷宮入りである。

Milgate, p.xxvi

Arthur F. Marotti, *John Donne: Coterie Poet* (Wisconsin 1986) p.129

Martin Seymour-Smith, p.33

- (8) John Carey, *John Donne: Life, Mind and Art* (Oxford 1981) p.148
- (9) Milgate, p.172
Milgate によれば少数ながら Coleridge, Charles Lamb, De Quincy, Oliver Elton, W.P.Ker らがこの詩を是認している。
- (10) Martin Seymour-Smith, p.29

Critical surveys of Donne's poetry tend to ignore, or at best treat very scantily indeed, *The Progress of the Soule*. This is undestandable: ... it is an enigmatic poem — and a fragment. But it deserves more

attention than it has had.

(11) Martin Seymour-Smith, pp. 29-30

(12) John Carey, p.149

(13) Milgate, p.xxxi

(14) Milgate, p.183

“Morea”はペロポネソス半島の異名であり、10世紀のビザンチンの年代記で使われ、また、漂流する島はプリニウスの地誌から、“the hopefull Promontories hea”は喜望峰の先端でありと、Donneは中世的雑学を並べ立てる。

(15) Marotti p. 131

Marottiはこれらの体制批判を、Donneの伝記的状况から説明しようとするが、作品と作者の個人的事情は切り離して考えるにしても、Marottiの説明する“alienated intellectuals”達のために“alienated intellectual”が書いた“the disillusioned idealism”の詩が *The Progress of the Soul* だというのは風刺詩全般にいえることであり、説得的である。

(16) Milgate, p.185

(17) Seymour-Smith, p.32

(18) J. M. Cohen, *The Baroque Lyric* (London 1963), p.128

(19) Frank J. Warnke, *Versions of Baroque: European Literature in the Seventeenth Century* (New Haven 1972) p.12